

## 〈国語教育特集〉

### 「交信する子ども」を育てる国語科教育

瀧川 靖 治

#### 一 はじめに

徳島大学卒業が昭和六十三年、徳島大学国語国文学会が設立されたのがその前年であった。郷土文化会館二階「菊水」において、木の香する升酒を飲んだことだけは鮮明に記憶に残っている。その学会設立十周年記念号の執筆依頼を受け（現場での実践報告等）、受諾するにはかなりの勇気がいった。というのも、現場経験九年の若輩者に、それも自己流の取り組みの私にたいした報告が書ける訳もなく、そこで、この紙面の拙い発表は私をたたいてもらう場にしたと勝手ながら考えた。

学生の頃は教師になっても土曜日・日曜日はぐらいいは遊べると暢気に考えていた。ところが、教科（国語）指導はもちろんのこと同和教育・道徳教育・学級経営・生徒指導・部活動等、教育のプロとしては当然でなければならぬことが山積していた。それも生徒とのかかわりは一人ひとり違い「教師の教師たる所以は何ぞや。」と真剣につきつけられることがたくさんあった。そん

な現場での教科（国語）にかける時間・エネルギーには限界があり、工夫・アイデア・他とのつながり等が必要であった。

国語教室には今般しい現実がある。各社アンケートの「嫌いな教科は何ですか。」の結果上位に必ず国語がくる。例外に漏れず私の国語教室でも、授業が重い・おもしろくない・しらけている状況がある。授業展開がパターン化し、授業をすればするほどかえって国語嫌いをつくっている現実がある。教師主導の従来通りの考えを押しつける授業の姿がある。また、生徒は楽しそうに活動しているのだけれど、本当に力がついているのか疑わしい授業の姿がある。本来は生徒が主体的に取り組み、目を輝かせ、生き生きと活動する国語教室であるべきだ。楽しみながら自然と力がついている国語教室であるべきだ。そのような教室は創造できないのだろうか。このように悩み模索していた折り、半年前「国語教育実践理論研究会」（KZR、「交信する子ども」を育てる国語教育）に出会った。出会って日もまだ浅いので十分理解できていないところもあり、間違った解釈になるかもわからないが、私の

以前の授業実践と結びつけて今回の報告にしたい。

## 二 「交信」について

### (1) 「交信」とは

- ① 「交信」は、異文化理解をとおして自己の形成を図る。
- ② 「交信」は、言語活動における子どもたちの主体性を増す。
- ③ 「交信」は、広義の「わかる」を促進する働きがある。

〔96、8、1 研究部テーマ解説／資料1〕

### (2) 「交信」の特質

- ① 「交信」は「機能」である。(能力ではない。)
- ② 「交信機能」は「よき活動」(子どもたちの興味関心に深く結びついており、いつのまにか力がついていく楽しい活動)の中で生かされる。
- ③ 「交信」は「働きかけ」「働き返され」「さらに働き返す」ことにより成立する。「働きかけ」だけでは交信とは呼ばない。
- ④ 「交信機能」には次のものが考えられる。

T機能 教師と自分との交信(一問一答・一斉授業等)

X機能 テキストと自分との交信(ひとり学習)。

P機能 友達と自分との交信(鉛筆対談・フリートイ

ム・小集団学習など)。

S機能 外部との交信(他学校・お家の人・他教師・

社会人など)。

O機能 外部情報との交信(図書資料・音声・映像資料など)。

Σ機能 ある区切りによるT・Oとの交信のまとめ

(トータルな自分との交信)。

- ⑤ 「交信機能」は2つ以上組合わせることにより強化される。

- ⑥ 交信の距離が大きくなるほどエネルギーは大となる(子どもたちにとっては難しくなる)。

- ⑦ 交信の距離が大きくなるほど「基礎基本」の学力形成は小となる。

### (3) 「交信機能」を生かす「活動」

- ① 「交信リテラシー」の「活動」も考えられること。
- ② 子どもたちの生活(特に興味・関心・意欲)や発達を十分踏まえたものであること。
- ③ 子どもたちの意欲や能力を刺激する活動であること。
- ④ 「基礎基本」の学力形成を踏まえたものであること。
- ⑤ 意欲的・継続的であること■年間計画をたてる。
- ⑥ いくつかの教材で・どの場面でも

〔96、8、1 小田原大会 安藤氏〕

### 三 授業実践報告―「平家物語」の導入―

平成七年十月九日（月）、統一大会が穴喰中学校で開催された。第三分科会で「表現活動を取り入れて、古典に対する興味・関心を高める学習」という主題で実践報告を行った。平家物語を題材にした報告であった。その報告の導入部分を抜粋し「交信する子ども」の観点から考えてみたい。

#### （1）扇の的―「平家物語」から―指導計画

#### 第三時 「速読」により古文に慣れ親しむ。（3／7時）

1 教師の「速読」を聞く。	・ 普段授業にのつてこない生徒にストップウォッチで計らせる。
2 「速読」の練習をする。	・ 十分間の練習時間とする。 ・ 秒針のついた時計を用意する。 ・ 練習中、普通の速さで読み確認させる。
3 班ごとに「速読」チャンピオンを決める。	・ 教室の誰にでもはつきりと聞き取れるようにという条件を出す。 ・ 学級チャンピオンに「速読」させる。
4 まとめする。	・ 普通の速さで全員で読ませる。 ・ 進歩の著しい生徒に読ませる。

#### （2）古典の効果的な導入の工夫―「速読」― 1 効果的な導入とは

導入の役割は、関心や考え方の違う個性を持った生徒たちにいかに興味をもたせるかということである。共通した課題や教材に取り組むなかで、一人ひとりに興味を呼び起こさせ、授業の主題に注意を集めさせ、自然のうちに学習への意識を集中させる導入こそが効果的といえる。

#### 2 第三時の設定理由

導入の役割は「古典は難しい。」「古典は読みにくい。と敬遠しがちな生徒をいかに興味を持って向き合わせるかである。今回は音声面に焦点をあて「速読」(三浦光俊氏:中学校教育技術Ⅱ)で読むことにより、知らず知らずのうちに興味・関心を呼び起こさせ、また、ストップウォッチを使って競争することにより、スポーツ感覚で楽しめたいと考えた。もちろん、歴史的な仮名遣いに対しての苦手意識も自然に克服できるものと考えた。

設定理由を考えると、前述(1)「交信」とはの①が――線部に、②が線部に、③が線部に含まれているのがわかる。「交信」の授業を創造する場合、設定理由からしっかり考えていく必要がある。

### 3 授業記録

- T (黒板に「速読」と書く。)
- 今日は「扇的」をできるかぎり速く正確に読む練習をします。
- S 「何それ。」「難しそう。」など口々にいう。
- (だが、表情は生き生きとしている。ストップウオッチを見て興味・関心を示しているのがわかる。)
- T では、まず私が読んでみます。誰かタイムを計ってくださいませんか。
- S 「僕が計る。」(日頃、授業に積極的に参加しない生徒が興味を持って手を挙げる。)
- T では、読みます。
- (教科書P一九五〜P一九九の古文を一気に読む。)
- T ○○さん、何秒かかった。
- S 一分四十秒です。

この部分の「交信機能」はT機能である。前述(3)「交信機能」を生かす活動②・③が——線部に出てきている。導入部分に(3)の②・③が出てくることは、生徒が主体的取り組み国語教室を創造していく上では効果的である。

T それでは、今から班ごとに練習してもらいます。がんばって私の記録を破って下さい。読みのわからないところがあつたら、班の友達に聞か、先生に聞いて下さい。

(班は九班にしてあり、ストップウオッチもこのとき班ごとにわたす。生徒は一回しか聞いていないので、歴史的仮名遣いなど読めない。だが、教師に質問したり友達に聞いたりして楽しそうに積極的に取り組んでいる。)

この部分にはT機能・X機能・P機能の三つ機能が組み合わせられており強化されている。(2)の⑤。また、(2)の③、(3)の③も——線部に含んでいる。

(一人三、四回読んだところで)

T はい、やめて下さい。私がゆっくり、もう一度読んでみます。自分の読みに間違いがないか確かめて聞いて下さい。

(生徒は集中して読みを聞いている。)

前出の「交信機能」はT機能である。教師の範読は二回目になるが、ここでは、生徒の目的意識がはっきりしており意欲もあるのだ、――線部のような姿が見られた。

T では、あと五分だけ練習時間を取ります。

(この五分間生徒は一生懸命読みの練習をしている。  
(五分後)

前出の「交信機能」はX機能である。テキストと自分との交信になるが、(2)の②、(3)の③であるため主体的な取り組みになっている。

T では、班ごとにチャンピオンを決めます。班員全員の記録をメモしておいて下さい。全員の記録が計れたら黒板に貼ってある用紙に書き込んで下さい。(速読タイム表は後に掲載。)ただし、教室の誰にも、はっきりと聞き取れるように読んで下さい。

(生徒は楽しみながら一生懸命読んでいます。)

この部分は、T機能、P機能の二つ以上の組み合わせにより強化されている。(2)の②、③、(3)の②、③を含んでいる。「挑戦」する楽しさを十分味わった活動であった。

T はい、それでは机をもとの形に直しなさい。

(机を直したのを確認して)

T では、前の表を見て下さい。チャンピオンは〇〇さんです。

〇〇さん読んで下さい。

(一番速かった生徒は、一分二十秒であった。他の生徒たちは感心して聞いた。)

この部分の「交信機能」はP機能である。身近な友の読みであつたし、学力的(ペーパーテストでいう)には高くない生徒だったので、――線部のような姿が見られた。

T 今度は普通の速さで読んでもらいます。全員起立して読み終わったら座って下さい。

(全員読めるようになってから不思議だ。)

この部分の「交信機能」はZ機能である。「交信」の特質(2)の②、いつのまにか力がついている楽しい活動で、ここでは「読む力」がついたことになった。

T 今日のまとめとして普通の速さで○○さんと○○さん読んで下さい。

(速かった生徒と遅かった生徒を選んで読ませたがほとんどかわりがなかった。)

前出の「交信機能」はZ機能である。生徒すべてが達成感と充実感を持ったと思う。

\*

「速読」タイム表

「速読」タイム表

タイム 班	3分以上	3～2分	2～1分	チャンピオ ンタイム
1班	2人	2人	0人	2:17
2班	1人	2人	1人	1:56
3班	1人	1人	2人	1:41
4班	3人	1人	0人	2:02
5班	1人	3人	0人	2:40
6班	1人	2人	1人	1:26
7班	0人	3人	1人	1:20
8班	2人	1人	1人	1:55
9班	0人	2人	2人	1:38

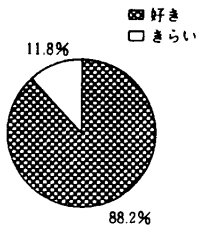
4

「速読」の授業を行ってみて

授業後、アンケート調査を行った。

〈アンケート結果〉

問一 このような授業は好きですか。



理由(好き)

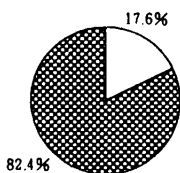
- ・挑戦できて楽しいから。
- ・知らない言葉を読むのはおもしろいから。
- ・ドキドキして眠くないから。

理由(きらい)

- ・知らない言葉を読むのは難しいから。
- ・読みにくいから。

問二 今日の授業で古文への抵抗はありましたか。

□ あった  
■ なかった



理由(あった)

- ・ごちゃごちゃしてて読みにくいから。
- ・読むのが苦手だから。

理由(なかった)

- ・知らない間に読めていたから。
- ・スリルがあつて楽しいから。
- ・おもしろかったから。

問三 今日の授業の友達の仕事の姿をどう思ったか。

- ・すごい
- ・みんな一生懸命だった。
- ・普通の本読みのときはあまり声の出ない子が、声が出ていたのが驚いた。
- ・おもしろくて楽しそうだった。
- ・迫力があつた。

問四 今後の授業や家庭学習でしてみたいこと。

- ・違う古文を読んでみたい。
- ・昔の言葉を知りたい。
- ・作者について調べたい。
- ・みんなできつしよに本を読みたい。

「交信機能」を生かす活動(3)の⑤、「意欲的・継続的であること」ということから、前出の生徒たちの意見を次時からの授業に生かしていく必要がある。

考察(統一大会の原稿そのまま)

アンケート結果からわかることは、問三の生徒の解答がすべてを物語っている。すべての生徒が友達との取り組み姿を「すごい。」と感じている。つまり、問一、問二で「きらい。」「抵抗がある。」と答えた生徒も実際は、真剣に取り組んでいたことになる。私の感想としても生徒が生き生きとして活動していたように思う。また、普段授業にのってこない生徒も最後に普通の速さで読むと、速く読んだ生徒と変わらない読み方ができた。そして、このことが大きな自身につながり、この後の学習(郡読・新聞づくりなど)でリーダー的役割を果たしたことは興味深い。さらに、「いつもは小さい声でしか本読みのできない生徒が、だんだん声が大きくなっていった。」のもうれしい成果であった。

ただ、次のような問題点もある。古文を正確に読む(正確に読むためには、ゆっくり、はっきり読むことが必要)ことは大切でそういう意味では逆行することになる。また、古文のもつ独特の美しい響きやリズムを感じるという意味でも不十分である。したがって、読みづらい生徒には、机間巡視で個別指導を行ったり、古文のもつ独特の響きやリズムについては、これ以後の授業でしっかりおさえ

させる必要があると考える。

考察結果から考えてもこの授業は生徒が主体的に取り組んだと思う。教師、テキスト、友達との「交信」を繰り返し授業が進んだ。その上、歴史的仮名遣い、漢字についても百パーセントの読みができていて、自然と力がついた。また、「古典を読みたい。」「朗読したい。」と考える生徒も多く、自己の幅を広げようとする態度もみられた。

#### 四 おわりに

「交信」のある授業には生徒が「主体的受信」と「主体的発信」を繰り返す必要があると思う。例えば、授業記録の「教師に質問したり友達に聞いたりして楽しそうに積極的に取り組んでいる。」場面が必要である。

「能力」については「交信」する中で読解力、理解力、表現力がついていく。自分の考えと友達のことを「比べ」「違い」を明らかにする。どうして考えが違うのか、経験、表現をもとに考え直す。伝えたいことを分かりやすくまとめる。相手によって説明の仕方を工夫する。こういう中から能力がついていくと思う。

また、目の前の生徒たちが社会人として活躍し始める十年後二十年後に役立つ国語教室を創造して行くことも(KZR)の考え方である。将来につながる授業、先を見据えた授業を展開して行く必要



がある。今教室が「死んでいる」のは将来につながる「生きた」授業が展開されていないことが大きな一因になっているように思う。安藤氏（K Z R、小田原大会 96、8、1-8、4）が述べているように「二十一世紀はインターネットを初めとする『情報化』の急激な進展により、大量の情報の中から情報そのものを吟味しなければ『情報』にならない時代になる。さらに、私たちの生活のどれもが世界中の国々との関わりによってしか維持することができないとこまできている。異文化を排除するのではなく、違いを認めつつ共生する方向を探らねばならない時代になる。これらのことから、今よりもっと主体性が求められ、かつ異文化間におけるコミュニケーションが求められる。そして、外部情報を吟味しながら取り込みつつ、自己を常に変革していくことが要求される。」まさにそういう時代だと思う。したがって、授業実践の中で「情報」を吟味する力、今までもっとと強力な主体性を身に付けさせなければならないし、違いを理解しつつも自己の考えを明確に主張できる能力と態度、違った考えから学び自己の幅を広げる能力と態度を養っていく必要があると思う。今後はどれだけ授業実践の中にこれらのことが生かされるかが大きな課題である。